

〈鳥海山麓だより6〉

幼なじみ

鈴木京子

茨城県の北部の、田んぼの多い田舎町で生まれ、高校卒業までそこで暮らした。十代の入り口ですでに、「この町を出る日こそが自分の人生の始まりの日」と、思春期にありがちな頑さで思いつめていたから、卒業後は、片手で数えられるほどの友人を残し、あの町での付き合いは自分から消してしまった。

だから、私には「幼なじみ」でくくれる人間関係がピンとこない。

コメ倉庫の季節雇いも終了間近となった十月下旬。コメの納入に来たハジメさんに「倉庫終わったあとは何してる？」と声をかけられ、赤カブの収穫を手伝うことになった。

赤カブの収穫は、ある程度の大きさになったものだけを抜きながら集め、次に葉っぱと根っこを包丁で切り落とす。畑のあちこちにできた山を数人で囲み、ひとつずつ片付けていく。モモちゃんとチエコちゃんとハジメさんと私の四人で四日間作業した。

モモちゃんとチエコちゃんはハジメさんの妹の同級生なんだってサ。つまり、三人とも同じ幼稚園、小学校、中学校に通い、同じ地域でそれぞれ新しい家族をつくり、子どもたちも同じ学校に通わせ、そして六十代の今もチャン付けで呼び合う。赤カブの葉っぱを切り落としながら、五十年前のやんちゃ（いたずら、悪さ）の裏話をあかし合い、大笑いする。すごいなあ！



遊佐町から望む冠雪した十一月の鳥海山

「故郷を捨てたモン（者）にはわがんね世界なんぞろ？」

ハイ、わがんねです。

ちょうど去年、高校卒業二十五年の記念同窓会の案内が来たけれど、行きたい気持ち半分、でも結局はこわくて行かなかった。

何がこわかったのかな。同窓会の様子を撮影したDVDを見てはつきりした。行かなくてよかったと思っただから。「変化」が受け入れられないんだ。ハジメさんたちみたいに年月を共有していないから。

十一月上旬、山形市内の友人三人が庄



雨の中、赤カブ収穫していたら、二重の虹が出たよ



農家さんが玄米を1トンパックに詰めてもってくる。品質を検査し、重量をはかって入庫する



秋のすごい味覚。近くの清流でトオルさんが採ってきてくれる。ドロドロにすりつぶして、みそ汁になる

内に遊びに来てくれて、隣町にある鳥海山麓の山荘で温泉と食事と静かな夜を楽しんだ。お風呂から部屋に戻るとき、廊下の先に浴衣姿のハジメさんがいた。お互いびっくりした後から聞いたら、「青年団活動三十周年OB会」だって。宴会場には、モモちゃんもチエコちゃんもいたんだって。